

## 第6章 対象や場面の違いから見た セクシュアル・ハラスメント認識と経験の特徴

### 第1節 第5章のまとめと検討課題

第5章では、体育系学生がスポーツの場で、一般学生がスポーツ以外の場で、それぞれ認識し経験するセクシュアル・ハラスメントについて比較検討した。その結果の概要は、次のようにまとめることができる：

- a) ある行為をセクシュアル・ハラスメントだと「思う」人の割合は、概して一般学生（＝スポーツ以外の場）よりも体育系学生（＝スポーツの場）で低く、体育系学生のセクシュアル・ハラスメントに対する認識が甘いことが確認された。
- b) ある行為を「見た」人の割合は、体育系学生よりも一般学生において高かった。
- c) ある行為を「受けた」人の割合も、「見た」人の割合と同様に、体育系学生より一般学生において高かった。
- d) ある行為をセクシュアル・ハラスメントとして経験している人の割合は、体育系学生よりも一般学生において高かった。これは上記 a) と c) の結果からも導かれることである。しかし、この結果だけをもって、日本においてスポーツ場面ではセクシュアル・ハラスメントが生じにくいと断定することはできない。

ところで、こうした結果についての知識を深めるためにはさらなる分析が必要である。本調査で収集したデータの範囲で考えれば、以上の結果は体育系学生と一般学生という対象に依存しているのだろうか、それともスポーツ内外の場面という状況に依存しているのだろうか。例えばセクシュアル・ハラスメントに関する認識については、一般学生のスポーツ以外の場における認識と比べて体育系学生のスポーツの場における認識は甘いことが確認された。この結果に関しては、体育系学生のスポーツ以外の場におけるセクシュアル・ハラスメント認識はスポーツの場における認識と比べて高いのか低いのか、あるいは一般学生によるスポーツの場におけるセクシュアル・ハラスメント認識はどうなのかという点が検討課題として残る。

そこで、本章では第5章における分析枠組み以外の組み合わせの比較について検討する。第5章で用いた図5-1を以下に再掲する。

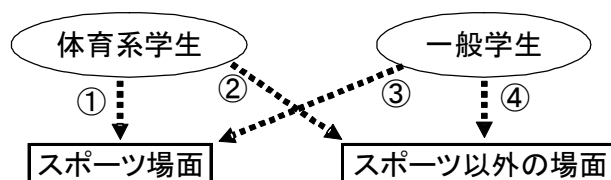


図5-1. 比較グループとセクシュアル・ハラスメント状況の組み合わせ

図5-1に示した4つの組み合わせ（①～④）のうち、さらに検討すべき比較をまとめると次のよう

になる：

<対象を固定した場面の比較>

- a) 体育系学生のスポーツ場面とスポーツ以外の場面の比較 (①と②)
- b) 一般学生のスポーツ場面とスポーツ以外の場面の比較 (③と④)

<場面を固定した対象の比較>

- c) スポーツ場面における体育系学生と一般学生の比較 (①と③)
- d) スポーツ以外の場面における体育系学生と一般学生の比較 (②と④)

以上の分析枠組みについて、分析項目としては第5章で取り上げたセクシュアル・ハラスメント認識、見聞、受けたことがあるか、受けたことがありセクシュアル・ハラスメントと認識しているか(=経験)、さらにセクシュアル・ハラスメントの加害者とそれに対する対処策があった。本章の分析は第5章の分析結果を補うために行われるので、この目標を達成するために特に必要だと思われる、セクシュアル・ハラスメント認識と、そうした行為を受けたことがあるかの2点に着目しながら検討していく。

第5章で得られた結果についての知識をさらに深めるためには、以上4つの分析枠組みに関して次の点を確認する必要がある。

視点 a) 体育系学生のセクシュアル・ハラスメント認識とそうした行為を受けた人の割合はスポーツ場面とスポーツ以外の場面によって異なるのか。異なる場合には、どのような違いなのか。

→ 第2節

視点 b) 一般学生のセクシュアル・ハラスメント認識とそうした行為を受けた人の割合はスポーツ場面とスポーツ以外の場面によって異なるのか。異なる場合には、どのような違いなのか。

→ 第3節

視点 c) スポーツの場面におけるセクシュアル・ハラスメント認識とそうした行為を受けた人の割合は体育系学生と一般学生の間で異なるのか。異なる場合には、どのような違いなのか。

→ 第4節

視点 d) スポーツ以外の場面におけるセクシュアル・ハラスメント認識とそうした行為を受けた人の割合は体育系学生と一般学生の間で異なるのか。異なる場合には、どのような違いなのか。

→ 第5節

## 第2節 体育系学生による“スポーツ場面”と“スポーツ以外の場面”の比較

<セクシュアル・ハラスメント認識>

図6-1に、体育系学生によるスポーツ場面とスポーツ以外の場面におけるセクシュアル・ハラスメント認識の比較結果を示した。それぞれの行為をセクシュアル・ハラスメントだと「思う」と答えた人の割合がスポーツの場とスポーツ以外の場でほとんどかわらない(差が5%未満)項目が19項目中

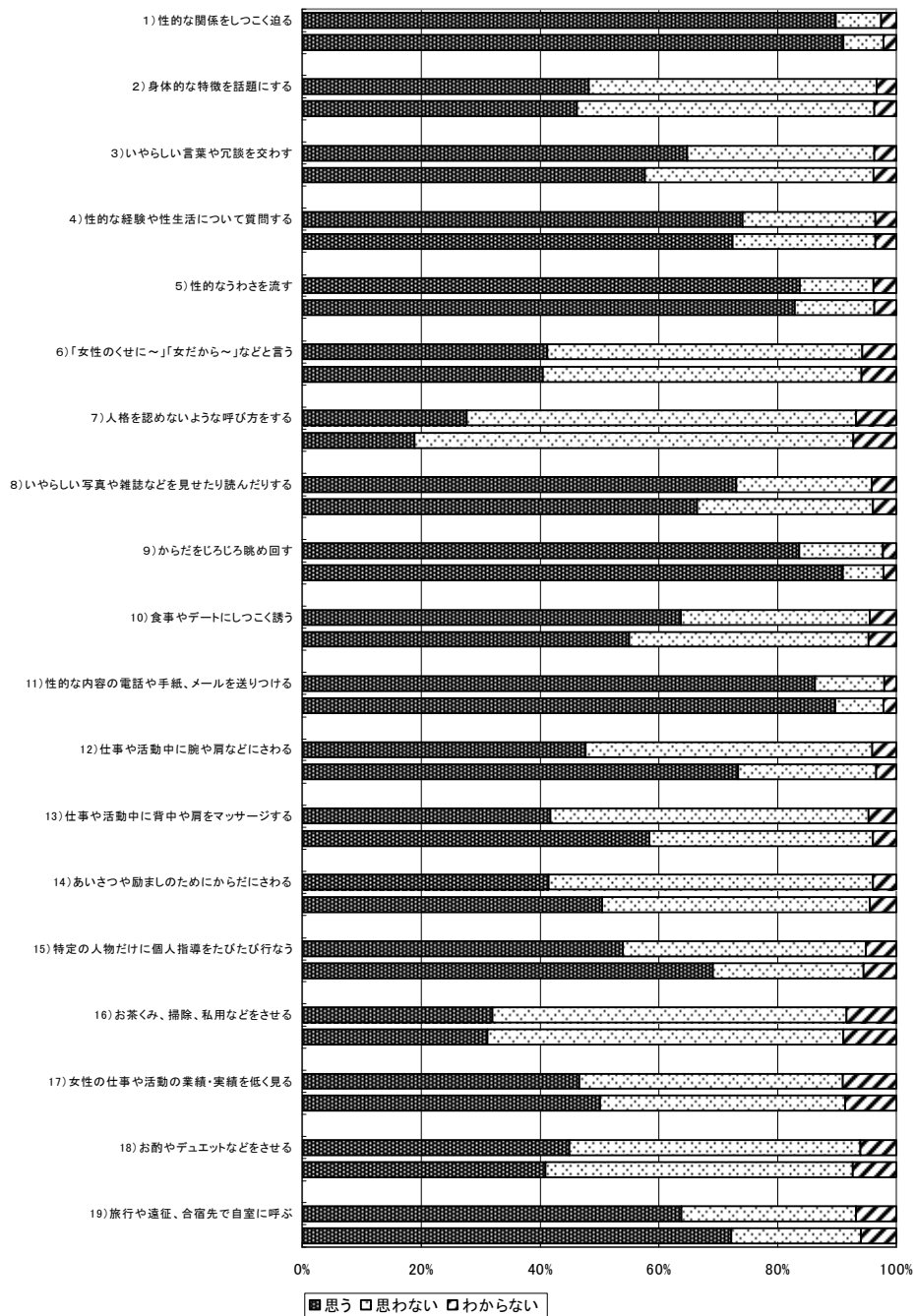


図6-1. 体育系学生によるセクシュアル・ハラスメント認識の比較  
(上段:スポーツの場 下段:スポーツ以外の場)

9項目あった。他方、その割合がスポーツの場とスポーツ以外の場で5%以上異なる項目は10項目あったが(3、7、8、9、10、12、13、14、15、19)、そのうちスポーツ場面において認識率が高かった項目は4項目(3、7、8、10)、スポーツ以外の場面において高かった項目が6項目(9、12、13、14、15、19)あり、スポーツの内と外どちらかの場面でより認識率が高いという一貫した傾向は見られない。つまりこれらの結果からは、体育系学生の全体的なセクシュアル・ハラスメント認識は、少なく

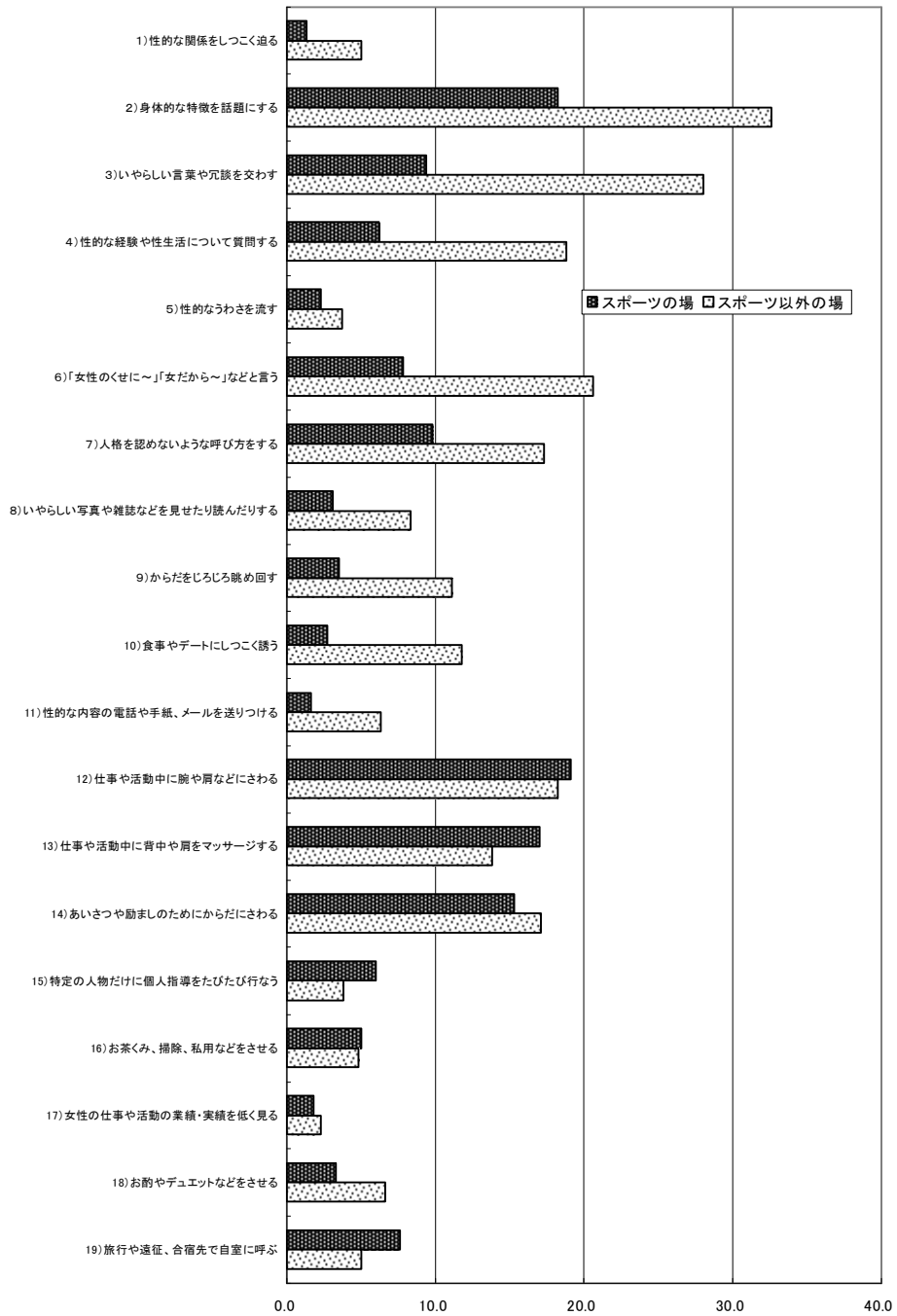


図6-2. 体育系学生が受けたことがあるセクシュアル・ハラスメント項目の比較  
(上段:スポーツの場 下段:スポーツ以外の場)

ともスポーツ内外という場面によっては異なるということができる。

<受けたことのあるセクシュアル・ハラスメント的行為>

19項目のセクシュアル・ハラスメントになりうる行為について、体育系学生が受けたことのある割合をスポーツの場とスポーツ以外の場で比較した(図6-2)。体育系学生のうちセクシュアル・ハラスメントになりうる行為を受けたことのある人の割合は、19項目中14項目でスポーツの場よりもスポ

ーツ以外の場において多かった。さらに、これら 14 項目中 8 項目 (2、3、4、6、7、8、9、10) ではスポーツの場とスポーツ以外の場の差が 5%以上と比較的大きかった。

他方、ある行為を受けたことのある人の割合がスポーツ以外の場よりスポーツの場において多かった項目は 5 項目 (12、13、15、16、19) であったが、両者の差はいずれも 5%よりも小さい。

以上の結果より、体育系学生がスポーツの場とスポーツ以外の場で受けるセクシュアル・ハラスメント的行為に関しては、概してスポーツ以外の場面で受けるケースのほうが多いと言えそうである。

### 第 3 節 一般学生による“スポーツ場面”と“スポーツ以外の場面”の比較

#### <セクシュアル・ハラスメント認識>

次に、一般学生によるスポーツ場面とスポーツ以外の場面におけるセクシュアル・ハラスメント認識の比較結果を図 6-3 に示した。各項目をセクシュアル・ハラスメントだと「思う」人の割合がスポーツ内外でほぼ同じ (5%未満) 項目は 19 項目中 9 項目であり、スポーツ内外で 5%以上の開きがあった項目は 10 項目あった。これら 10 項目のうち 3 項目 (12、13、15) ではスポーツの場と比べてスポーツ以外の場面での認識率が高かった。他方、スポーツ場面におけるある行為がセクシュアル・ハラスメントとして認識される傾向が強い項目も 7 項目 (2、3、4、7、8、10、18) があった。これらの結果より、一般学生によるセクシュアル・ハラスメント認識がスポーツの場とスポーツ以外の場で異なり、さらにはスポーツの内外どちらかの場面で認識率が高いという点について一貫した傾向が見られるとは言い難い。

ところで、スポーツの場よりもスポーツ以外の場において認識率の高かった 3 項目「12) 仕事や活動中に腕や肩などにさわる」「13) 仕事や活動中に背中や肩をマッサージする」「15) 特定人物だけに個人指導を行う」は、第 5 章で見られたように、体育系学生のスポーツの場と一般学生のスポーツ以外の場における認識の比較において体育系学生の認識が顕著に低かった項目でもある。これら 3 項目に関しては、一般学生もスポーツの場内外で異なったセクシュアル・ハラスメント認識をしており、さらにスポーツ以外の場ではセクシュアル・ハラスメントになると考えるこれらの項目は、スポーツの場においてはセクシュアル・ハラスメントとして認識されない傾向を確認できる。

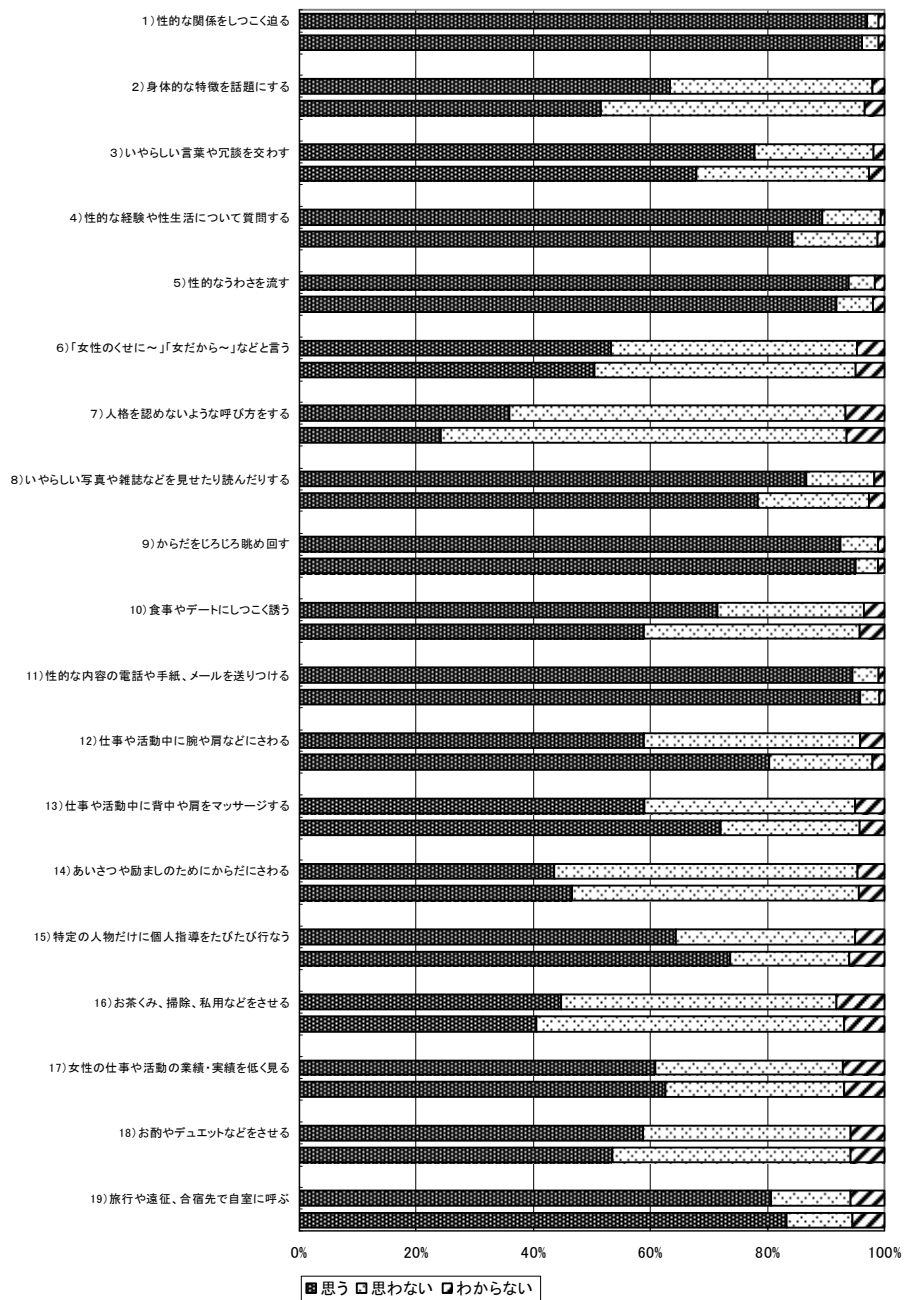


図6-3. 一般学生によるセクシュアル・ハラスメント認識の比較  
(上段:スポーツの場 下段:スポーツ以外の場)

### <受けたことのあるセクシュアル・ハラスメント的行為>

図6-4には、一般学生のうち19の行為を受けたことがあると回答した人の割合をスポーツ内外の場に分けて示した。最初に指摘できるのは、ある行為を受けたことがある人の割合が、全19項目において、スポーツの場よりもスポーツ以外の場において高いという点である。さらに12項目(1、2、3、4、6、7、8、9、10、11、12、14)において、ある行為を受けた率のスポーツ内外の差が5%以上

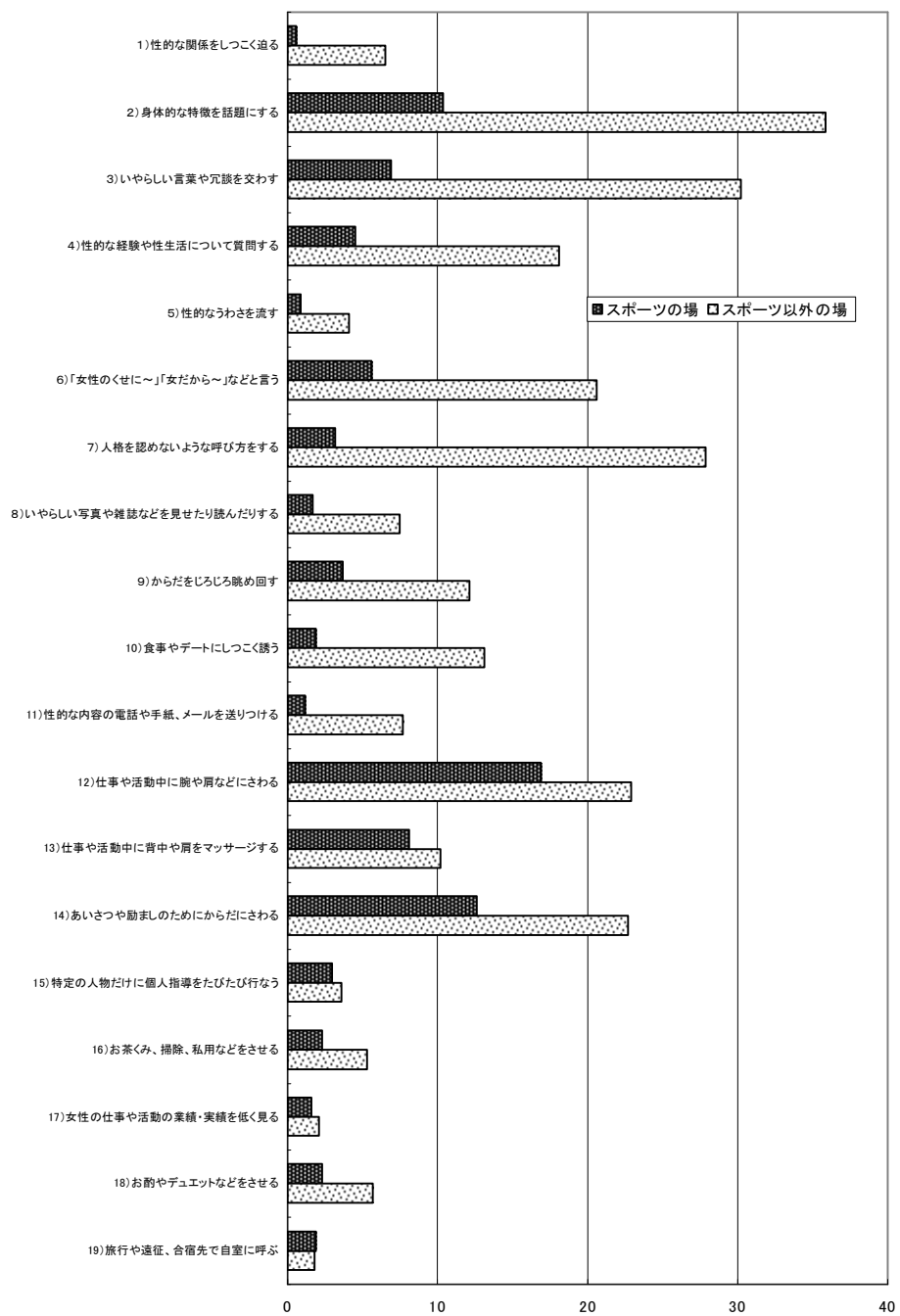


図6-4. 一般学生が受けたことがあるセクシュアル・ハラスメント項目の比較  
(上段:スポーツの場 下段:スポーツ以外の場)

あり、スポーツの場よりもスポーツ以外の場において各項目を受けた率が高い傾向が一貫してみられる。

以上の結果より、セクシュアル・ハラスメントになりうる行為を受けたことのある人の割合は、体育系学生と同じように一般学生においても、スポーツの場よりもスポーツ以外の場面において多いとすることができそうである。

以上は分析対象を体育系学生あるいは一般学生に限定し、その分析対象に関してセクシュアル・ハラスメントが生じる場面をスポーツ内とスポーツ外に分け、比較分析した結果である。次に、セクシュアル・ハラスメントが生じる場面をスポーツ内あるいはスポーツ外に限定し、各場面においてセクシュアル・ハラスメント的行為を受けたことがあるかについて体育系学生と一般学生で比較する。

#### 第4節 “スポーツ場面”における体育系学生と一般学生の比較

##### <セクシュアル・ハラスメント認識>

図6-5に、スポーツ場面における体育系学生と一般学生のセクシュアル・ハラスメント認識を示した。体育系学生と一般学生の認識率を比較するならば、全ての項目において一般学生の認識率は体育系学生のそれを上回っていることがわかる。さらに両者の認識率の差が5%以上ある項目は19項目中18項目あり、そのうち13項目(2、3、4、5、6、8、12、13、15、16、17、18、19)では認識率の差は10%以上に及ぶ。これらのことから、スポーツ場面におけるセクシュアル・ハラスメント認識を比較するならば、一般学生は体育系学生よりも認識率が高いというはっきりとした傾向を確認できる。

##### <受けたことのあるセクシュアル・ハラスメント的行為>

19のセクシュアル・ハラスメントになりうる行為を受けたことがある人の割合を、体育系学生と一般学生別に、図6-6に示した。ここでも19項目中16項目に関して、その行為を受けたことがある人の割合は体育系学生よりも一般学生が多かった。さらに10項目(1、2、3、4、6、7、9、10、11、14)においては、両者の差が5%以上あった。

他方、ある行為を受けた人の割合が一般学生よりも体育系学生が多かった項目は3つあり、「13)活動中に背中や肩をマッサージする」「15)特定の人物だけに個人指導を行う」「19)遠征や合宿先で自室に呼ぶ」であった。第5章における体育系学生のスポーツの場と一般学生のスポーツ以外の場の比較においても、これら3つの行為を受けた人の割合は一般学生よりも体育系学生で高いという結果が得られている。本節の分析結果において、マッサージや個人指導、自室に呼ぶなどの行為は、体育系学生がスポーツの場において遭遇しやすい行為だということを確認できる。



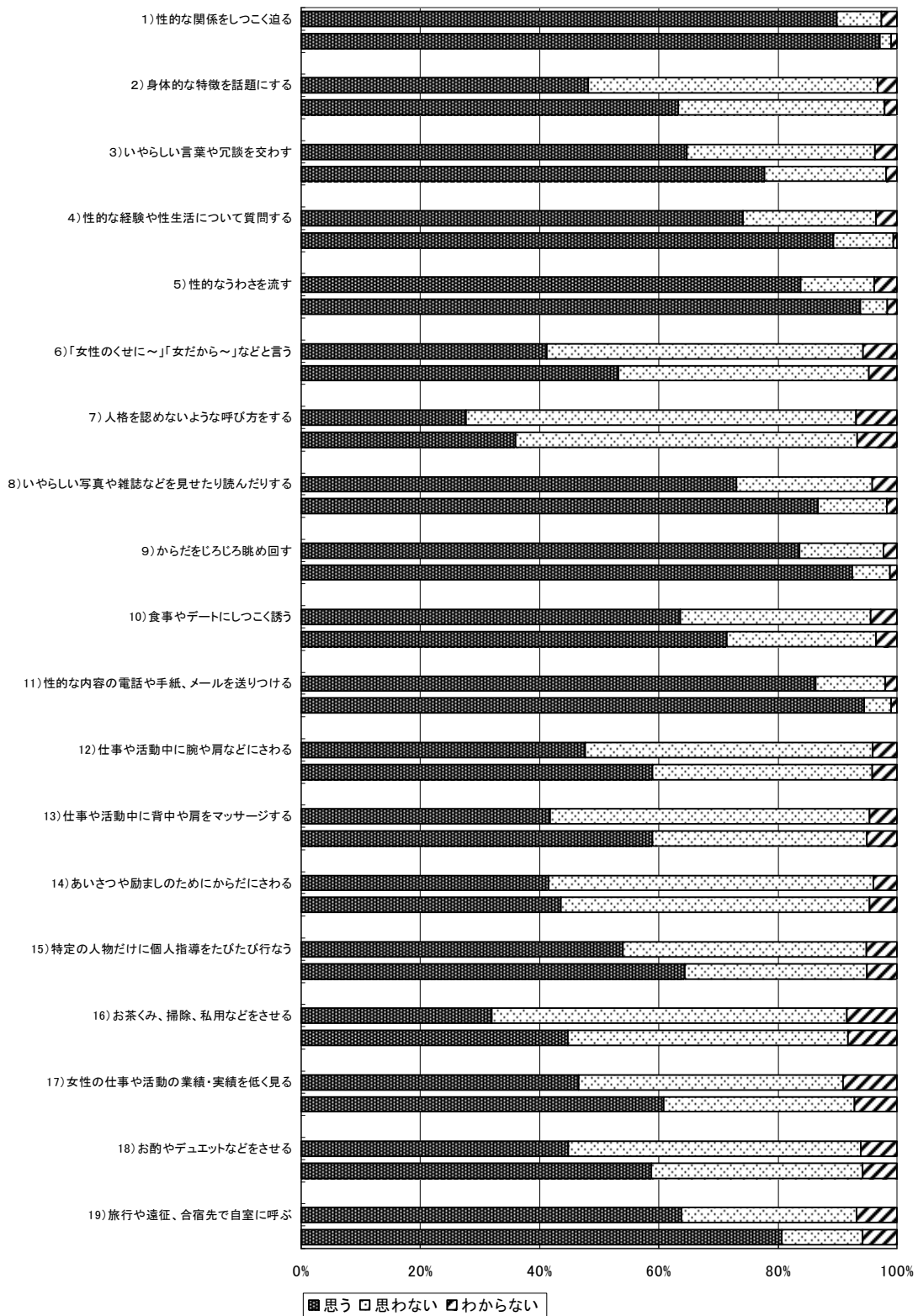


図6-5. 体育系学生と一般学生によるスポーツ場面におけるセクシュアル・ハラスメント認識の比較  
 (上段: 体育系学生 下段: 一般学生)

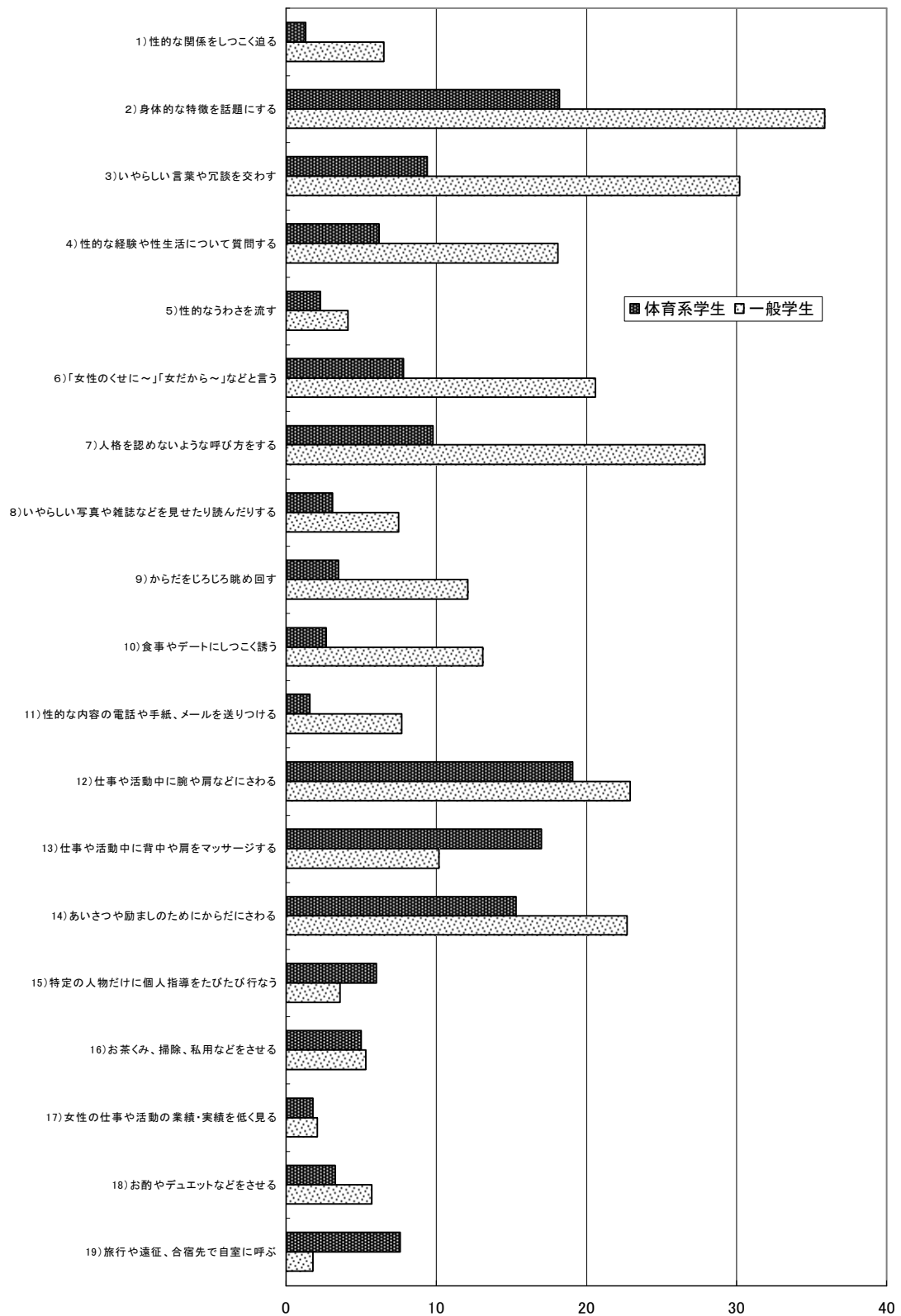


図6-6. 体育系学生と一般学生がスポーツ場面で受けたことがあるセクシュアル・ハラスメント項目の比較 (上段:体育系学生 下段:一般学生)

## 第5節 “スポーツ以外の場面”における体育系学生と一般学生の比較

### <セクシュアル・ハラスメント認識>

今度はセクシュアル・ハラスメントが起こりうる場면을スポーツ以外の場に限定し、そこでのセクシュアル・ハラスメント認識について、体育系学生と一般学生別に示した(図6-7)。ここでも、ある行為をセクシュアル・ハラスメントだと思う人の割合は体育系学生よりも一般学生において高いという傾向が19項目中18項目において認められる。そしてさらに15項目(1、2、3、4、5、6、7、8、11、12、13、16、17、18、19)では、一般学生の認識率は体育系学生のそれよりも5%以上高かった。「14)あいさつや励ましのためにからだにさわる」では、唯一、体育系学生の認識率が一般学生よりも上回ったが、その差は3.9%であった。これらのことから、スポーツ以外の場におけるセクシュアル・ハラスメントに関しても、一般学生は体育系学生よりも認識が高いといえるだろう。

### <受けたことのあるセクシュアル・ハラスメント的行為>

図6-8には、セクシュアル・ハラスメントになりうる行為のうち、体育系学生と一般学生が“スポーツ以外の場”において受けた割合を示した。図6-6の“スポーツの場”の結果と比べると、概して体育系学生と一般学生の割合の差が小さいことを見て取れる。体育系学生の割合が一般学生よりも高い行為は7項目、反対のケースは11項目あるが(残りの1項目は同率)、両者の差が5%以上ある行為は「7)人格を認めないような呼び方をする」「14)あいさつや励ましのためにからだにさわる」の2項目だけであった。つまり、スポーツ以外の場においては、体育系学生と一般学生がセクシュアル・ハラスメント的行為を受ける割合がどちらかで高いといった一貫した傾向は見られない。

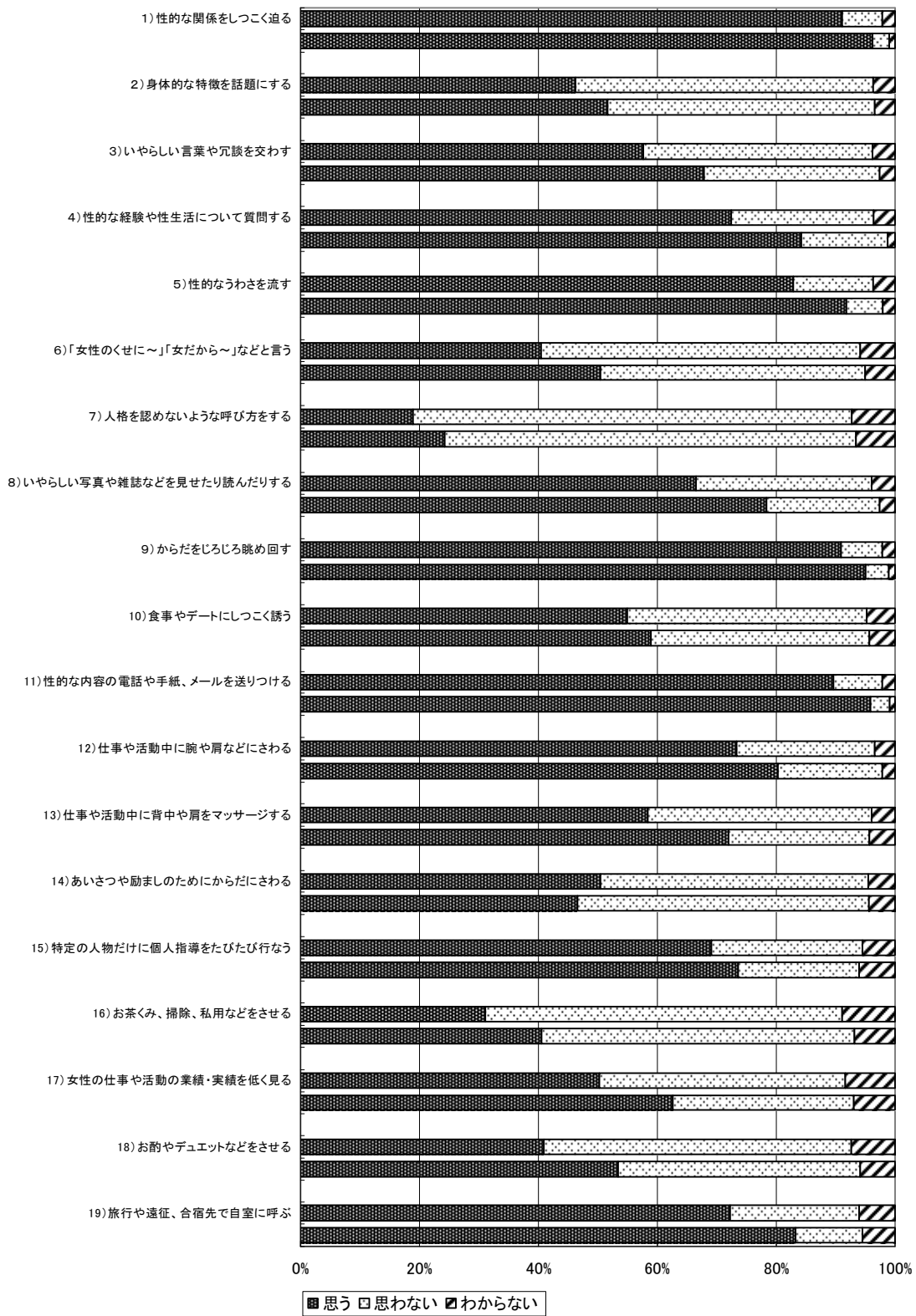


図6-7. 体育系学生と一般学生によるスポーツ以外の場におけるセクシュアル・ハラスメント認識の比較  
 (上段:体育系学生 下段:一般学生)

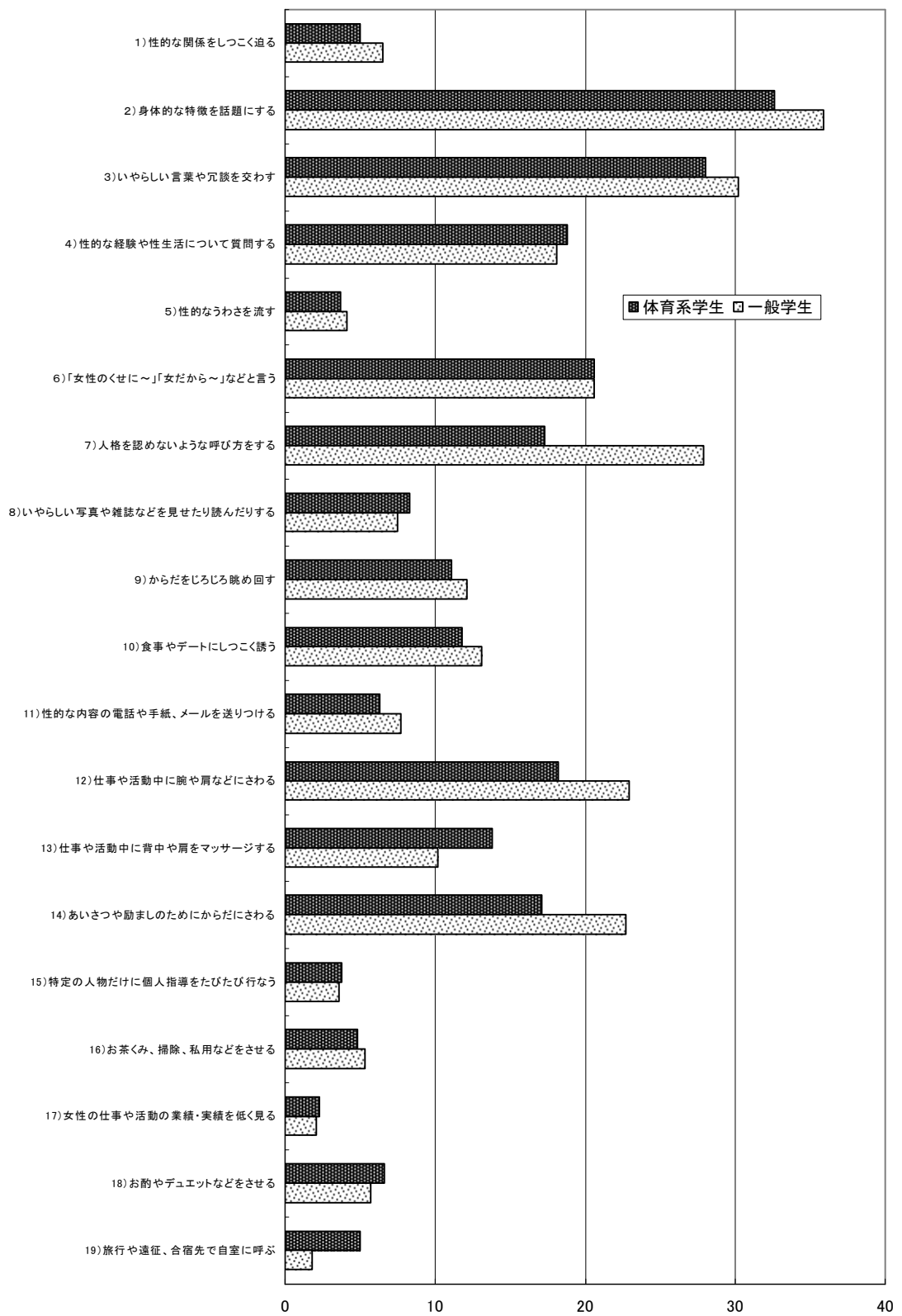


図6-8. 体育系学生と一般学生が受けたことがある“スポーツ以外の場”におけるセクシュアル・ハラスメント項目の比較 (上段: 体育系学生 下段: 一般学生)

## 第6節 第5章の分析結果の再検討

### <セクシュアル・ハラスメント認識>

以上の結果をふまえ、第5章の結果について検討してみたい。本章の最初でまとめたように、ある行為をセクシュアル・ハラスメントだと「思う」人の割合は、概して一般学生（＝スポーツ以外の場）よりも体育系学生（＝スポーツの場）で低く、体育系学生のセクシュアル・ハラスメントに対する認識が甘いことが確認された。こうした認識に関しては、体育系学生も一般学生もスポーツ内外で大きな違いは認められず（本章第1節、第2節）、またスポーツの場でもそれ以外の場であっても体育系学生より一般学生のほうが認識が高かった（第3節、第4節）。これらの結果を図にまとめると、次のようになる。

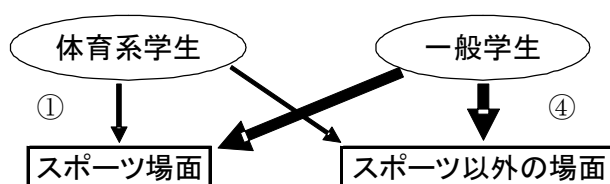


図6-9. セクシュアル・ハラスメント認識に関する分析結果の略図

図6-9中の矢印の太さは認識の高さを示しており、太いほど認識が高い。一般学生のセクシュアル・ハラスメントに対する認識はスポーツの内外を問わず相対的に高く、体育系学生のそれは低かった。第5章における、体育系学生のスポーツ場面における認識は一般学生のスポーツ以外の場面における認識よりも低い（図6-9中①と④）という結果はこうした図式から生じたものであり、体育系学生か一般学生かといった分析対象に依存したものであることを確認できる。

### <受けたことのあるセクシュアル・ハラスメント的行為>

次にセクシュアル・ハラスメントになりうる行為を受けたか否かについて検討する。第5章の体育系学生（スポーツの場）と一般学生（スポーツ以外の場）の比較では、ある行為を「受けた」人の割合は、概して体育系学生より一般学生において高かった。そして本章の分析の結果、体育系学生と一般学生いずれの場合も、ある行為を受けた人の割合はスポーツ場面よりもスポーツ以外の場において多かった。また、スポーツの場面では体育系学生よりも一般学生においてそうした行為を受ける率が高かったが、スポーツ以外の場面では体育系学生と一般学生の間で違いは見られなかった。以上の結果の概略を図6-10に示した。

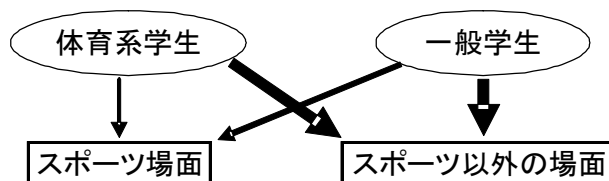


図6-10. セクシュアル・ハラスメント的行為を受けた経験に関する分析結果の略図

図6-10において矢印の太さは、ある行為を受けた人の割合の多寡を表している。図より、セクシ

ュアル・ハラスメントになりうる行為を受けた人の割合は、体育系学生と一般学生いずれにおいてもスポーツ以外の場面で高くなっていることを確認できる。つまり、セクシュアル・ハラスメント的行為を受けた人の割合に関しては、セクシュアル・ハラスメント認識の場合のように体育系学生と一般学生という分析対象に依存しているのではなく、スポーツの場かそれともスポーツ以外の場かといったセクシュアル・ハラスメントが起りうる場面に依存していそうである。スポーツ以外の場面では、体育系学生か一般学生かには関わらず、セクシュアル・ハラスメント的行為を受ける人の割合は高いのである。

ただし繰り返しになるが、この結果がすなわち、日本のスポーツ場面ではセクシュアル・ハラスメントが起りにくいことを意味するわけではない。セクシュアル・ハラスメントはハラッサーである加害者がいて初めて起こるが、この加害者の人数はスポーツ場面とそれ以外の場面では異なり、後者において多く存在すると思われる。また、今回の分析対象が一日の中でスポーツとスポーツ以外の場で生活する時間も圧倒的に後者において長いと推測される。こうした、加害者になりうる人物の人数や、その場面で過ごす生活時間をコントロールせずにセクシュアル・ハラスメントの発生率をスポーツ内外で比較しても、厳密な意味でどちらにおいて発生率が高いかを断定することはできないからである。